明治宮殿の建設経緯に見る表宮殿の設計経緯

THE DESIGN PROCESS OF THE *MEIJI PALACE'S* MAIN HALL

山崎 鯛介*

Taisuke YAMAZAKI

This paper shows the majestic design of the Meiji Palace's main hall was not decided at the date of commencement of work, but designed simultaneously with the progress of work. In the process of design, the ceiling of the hall was raised higher, and some western ornaments were added to the walling. An image of the ballroom was introduced in the design by *Ito Hirobumi* as the minister of the Imperial Household Agency, who insisted on the importance of holding evening parties in the palace as the diplomatic necessities.

Keywords : *Meiji Palace, Modern Japanese-style, interior design*

明治宮殿、近代和風、内部意匠

1. 緒言

明治21年に竣工した明治宮殿（正式には「宮城」）の建設事業は、明治時代前半の日本の建築界における最大規模の国家的事業であり、その建設経緯や建物の内容については、『明治工業史 建築篇』（工学会、昭和2年）を始め、これまでも日本近代建築の通史を扱った著作¹⁾などでたびたび紹介されてきた。明治宮殿に関する詳細な研究論文としては、小野木重勝博士の2つの研究論文『明治洋風宮廷建築』（相模書房、昭和58年）と『近代和風宮廷建築における和洋折衷技法に関する研究』（昭和62年度科学研究費補助金〔一般研究C〕研究成果報告書）がある。前者では、主にポアンビルやコンドル設計の洋風謁見所の意匠の特徴や造営過程で行われた地質調査や材料試験、基礎に用いられた洋風技術について明らかにし、それらの技術史的重要性を指摘している²⁾。一方、後者では、構造技法や内装・外装に用いられた「技法」に注目し、明治宮殿の和洋折衷が技術的側面においても見られることを指摘している³⁾。このように、明治宮殿自体についてはこれまで学術的に多くのことが明らかにされてきたといえる。

明治宮殿はまた、近年調査・研究が進んできた近代和風建築の歴史において、その最初期の重要な建物として位置づけられることも多い。特に「近代和風」という視点からは、宮中儀礼の場である表宮殿に用いられた和洋折衷の内部意匠について取り上げられることが多

く、その柱・長押や格天井などに伝統的な和風意匠を用いながら、立式で使用するために床を寄木張りとし、洋風家具やシャンデリアを備えた和洋折衷の内部意匠は、格の高い接客空間のあり方として後世の建築にも大きな影響を与えたことが指摘されている⁴⁾。

このように後世の建築に与えた影響が大きいと考えられる以上、明治宮殿自体の建設経緯や設計内容が具体的に明らかにされることは不可欠と考えられる。しかし、あらためて明治宮殿を建造物として具体的に把握しようとするとき、その建設経緯や設計内容についてはまだ十分に明らかにされていない点も認められる。そこで本研究では、明治宮殿の建設経緯や設計内容について詳細な検討を行い、そのデザインの成立過程について明らかにした。またそれらを時代背景の中に位置づけ、その意図についても併せて考察した。明治宮殿の造営過程は計画段階も含めて長期にわたることが知られているが、以上のような観点から、本研究では明治16年7月に木造計画に決定してから竣工するまでの建設経緯を扱うこととする。また、明治宮殿は表宮殿・奥宮殿など数多くの建物から構成されているが、本研究では大空間・和洋折衷で知られる表宮殿の建物に注目して考察を行った。

明治宮殿の建設経緯を扱った既往研究としては、小野木重勝『明治洋風宮廷建築』第2章第2節「皇居造営計画の変遷」があり、この中では当初計画について、基本方針や設計体制・配分予算などが明らか

* 東京工業大学大学院理工学研究科 助手・工修

Research Assistant, Dept. of Architecture, Graduate School of Science and Engineering, Tokyo Institute of Technology, M. Eng.

にされている (pp.29-30) が、その後の経緯については概要紹介に留まり、実際の事業がどのように進められたか、また表宮殿の意匠がどのような設計経緯で形成されたかについては触れられていない。稲葉信子『木子清敬と明治20年代の日本建築学に関する研究』(東京工業大学博士論文、平成元年) 第3章第2節「明治宮殿の造営」では、木子清敬が表・奥宮殿の設計において極めて重要な役割を担ったことが指摘されているが、設計経緯については「規模がきわめて大きい建築であり、しかもその建設の経緯や建物の性格上、関与した官僚、動員された技術者の数も多く、実際の設計がどのように進められていったのかを判断するのは難しい」(pp.48-49) とされている。実施過程における木子の役割については、藤岡洋保、斎藤雅子、稲葉信子「東京都立中央図書館木子文庫所収の明治宮殿設計図書に関する研究」(『日本建築学会計画系論文報告集』第431号、pp.137-146) において、木子文庫所蔵史料を用いてより詳細に検討されているが、設計経緯の全体についてはまだ明らかにすべき点を多く残していると考えられる。

工事過程に関するものとしては、研究論文ではないが中村達太郎「皇居御造営の頃」(『建築雑誌』昭和10年7月号) に、造営途中で大変更があったことが書かれている。この中で中村は、宮内省庁舎の移転、表宮殿の規模拡大、屋根葺材の変更などが明治18年5月に伊藤博文の指示によって行われたと述べている (p.116) が、小野木博士は『明治洋風宮廷建築』第3章第5節「コンドルと宮内省庁舎計画」の中で、『皇居御造営誌』の複数の記述を用いて宮内省庁舎の移転時期に再検討を加え、庁舎の移転が明治18年5月ではなく明治16年12月6日の計画変更に合わせて既に内決していたと指摘している (p.97)⁵⁾。このことから、中村の発言に見られる表宮殿の設計変更についても、それぞれの時期については再検討が必要と考えられる。

史料としては、宮内庁書陵部所蔵の『皇居御造営誌』(内匠寮) と『皇居造営録』(皇居御造営事務局)、そして東京都立中央図書館木子文庫所蔵の明治宮殿関係史料を主に用いた。『皇居御造営誌』は、明治宮殿が竣工して4年後の明治25年6月に宮内省によって編纂されたもので、合計130冊に造営経緯や建物の仕様がまとめられている⁶⁾。同史料は竣工記録としての性格が強いため、造営経緯とともに明治宮殿の竣工時の意匠について知るのに最適な史料と考えられる。『皇居造営録』は、宮内庁所蔵の皇居造営に関する公文書で、ファイル約700冊⁷⁾ といわれるが詳細は不明である。文書は明治17年1月に造営関係文書の形式が制定⁸⁾ されて以降のものがほとんどであるが、『皇居御造営誌』に引用されていない資料も数多く含まれており、明治17年以降の設計経緯については『皇居御造営誌』よりも詳細に知ることができる。木子文庫の明治宮殿関係史料については、史料が造営に際してつくられたものであること、史料の大半(7845点中7524点)を図面が占めること、内容については賢所・奥宮殿・表宮殿のほぼ全体にわたり、詳細図も多数存在すること、作成時期の推定可能な史料が点数の40%を占めていることなどが藤岡らによって明らかにされている。木子文庫には『皇居造営録』よりも図面が多く残されていると考えられることから、両者を同時に検討することで計画案の変更過程を具体的に知ることができると考えられる。

明治宮殿の建物配置を示したのが図1である⁹⁾。既往研究を基に明治宮殿の概要を述べておくと、「宮城」の敷地は旧江戸城の西ノ丸およびその周辺で、表宮殿は西ノ丸、奥宮殿は山里、賢所は吹上、女官部屋は紅葉山、宮内省庁舎は紅葉山下に建設された。宮殿の建物は公

表宮殿

1. 謁見所	8. 東化粧の間	15. 東車寄受付の間
2. 饗宴所	9. 西化粧の間	16. 内謁見所 (広間)
3. 後席の間 (広間)	10. 東脱帽所	17. 同 (北の間)
4. 同 (婦人の間)	11. 西脱帽所	18. 御学問所
5. 同 (小食所)	12. 北溜の間	
6. 東溜の間	13. 南溜の間	
7. 西溜の間	14. 御車寄受付の間	

奥宮殿

19. 聖上常御殿
20. 皇后宮常御殿
21. 皇太后宮御休所
22. 宮御殿
23. 女官候所
24. 申口取合の間
25. 御宣代

図1. 明治宮殿竣工平面図

用室としての表宮殿と住居としての奥宮殿およびそれぞれの附属施設から構成され、表宮殿と奥宮殿との境界は、御学問所と聖上常御殿の間に設けられていたと考えられる。床面積は5,855.805坪¹⁰⁾であったと考えられ、構造形式は一部¹¹⁾を除いて木造平屋建てで、外観は入母屋屋根を主とした和風意匠で建設された。内部意匠は表宮殿と奥宮殿で異なり、表宮殿では謁見所や饗宴所などの主要建物¹²⁾を大空間とし、和風の軸組や格天井に床の寄木張りやガラス扉、緞帳などの洋風要素を加味した独特の和洋折衷が用いられた。それに対し奥宮殿の聖上常御殿や皇后宮常御殿は、暖炉や絨毯なども導入されているが、基本的には床の間や明障子などを備えた和風建築として建設された。

皇居の造営計画については、既に以下のことが知られている。すなわち、明治6年5月5日に西ノ丸皇居(旧江戸城西ノ丸御殿)が焼失した後、皇居再建の布達は翌7年に出されたが、政費節約などを理由に計画は延期され、計画は明治12年に造営の議が再建されてようやく具体化した。これ以後は、敷地や表宮殿の構造・意匠形式をめぐって変更がくり返され、ポアンビル設計の赤坂仮皇居洋風謁見所の移築を前提とした洋風謁見所移築計画(明治12~13年)、表宮殿・奥宮殿のいずれも木造とした木造宮殿計画(明治13~14年)、コンドル設計の山里正殿と木造の吹上宮殿計画(明治14~16年)などを経て、明治16年7月に「木製仮皇居」計画として実施することが決定した。以後の実施過程では、明治17年4月14日に地鎮祭が行われ、主要建物としては謁見所が最も遅く明治21年5月23日に竣工し、同年10月27日に皇居を「宮城」と改称した。

なお、明治宮殿の各建物の名称については、竣工後の明治21年12月27日に正式名称が宮内省から布達され、たとえば造営中に「謁見所」と呼ばれていた建物は「正殿」へ、「御学問所」と呼ばれていた部屋は「表御座所」へと改称された。本研究では、造営中の史料を多く扱う関係上、「謁見所」など造営中の名称を用いることとする。

2. 建設過程で行われた事業規模の拡大と表宮殿の拡充

皇居造営の事業計画については、小野木重勝『明治洋風宮廷建築』の中で明治16年7月・8月に定められた当初の基本方針が紹介されており、工期は5年で竣工期限は明治21年6月とされたこと、明治16年度以降の事業予算は総額250万円で計画されたこと、事業区分は4区に分けられ、奥宮殿は第一区、表宮殿は第二区に属し、それぞれの工事担当者は第一区が木子清敬と和田善平で、第二区は中村一正と樋口正峻であったことなどが明らかにされている(pp.29-31)。しかし、事業の最終結果について触れられていないため、実際の事業規模がどの程度のものであったかについては不明点が多い。そこで本章では、『皇居御造営誌』などを用いてまず事業の最終結果を明らかにし、次に当初計画と最終結果の規模や予算・工程を比較することで、事業計画の変化とその要因についても明らかにした。

平面計画については、基本方針が策定された明治16年8月2日に最も時期に近い平面図として、『皇居御造営誌編纂下調図』(以下『下調図』)第79号図面(図2、明治16年8月4日)がある。この平面図を竣工建物の平面図と比較すると、奥宮殿については聖上常御殿、皇后宮常御殿、女官候所などの平面が竣工建物とほぼ同じと考えられる。特に聖上常御殿と皇后宮常御殿については、木子文庫所収「第壹区坪数及附属共調書」¹³⁾(明治16年8月3日)から、床面積についても竣工建物とほぼ等しいと考えられる。これらの建物は、その後竣工に至るまで平面計画に変更がほとんど見られない¹⁴⁾ことから、明治16年8月の時点で平面がほぼ決定していたと考えて良い。

それに対して表宮殿は、東西溜りの有無、後席間の位置や階数、謁見所廻りや侍従関係詰所の平面計画など多くの点で違いが見られ、また個々の建物についても謁見所、饗宴所、後席の間などは平面が拡大されたと考えられる。床面積について見ると、木子文庫所収の史料(無題、明治16年8月9日)¹⁵⁾には表宮殿の床面積が2044坪と記されており、また宮内省庁舎の移転と同時に進められた表宮殿の規模拡大について『皇居御造営誌・巻之七』に「謁見所ヲ始メ饗宴所其他建築ノ御口達有之建坪貳千有餘ノ増加ヲ来ラシ」(明治18年5月25日条)と、増加分の床面積が約2000坪強であったと記されていること

図2. 明治16年8月の「木製假皇居」計画図
(『皇居御造営誌編纂下調図・第貳』所収)

から、表宮殿は明治16年12月の規模拡大により床面積がほぼ倍増されたと考えられる。

次に予算について見ると、当初の事業費は先掲の総額250万円で計画されたが、「該決算ノ総額ハ金四百拾五萬三千六拾七円六錢四厘ナリ」¹⁶⁾と、最終的には415万3067円6錢4厘

に増額されたと考えられる。この予算の増額は、2度にわたる追加申請に基づくと考えられる。1回目(98万円)は明治18年5月29日に、2回目(48万8232円)は明治19年12月21日に皇居御造営事務局から宮内卿宛てに稟議が出され、後に裁可されている¹⁷⁾。またこの増額の費目について見ると、いずれも表宮殿の拡充にそのほとんどが使用されたと考えられる。1回目は増額の85%(83万3千円)が「折柄謁見所ヲ始メ饗宴所其他建築ノ御口達有之建坪貳千余ノ増加ヲ来ラシ随テ諸材料其他ノ増費ハ勿論瓦屋根ヲ銅板葺ニ変替且上記空気暖房器械ヲ新設シ」とあるように、表宮殿の規模拡大に伴う材料費、屋根葺材の変更、暖房設備の新設費など表宮殿の拡充にあてられ、2回目は増額の81%(39万4854円44錢1厘)が「外國裝飾品購買費」や「内國同断及電気燈ランプ費」とあるように、表宮殿の家具・装飾費にあてられたと考えられる。

工期については、先掲のように当初の竣工予定が明治21年6月として計画され、主要建物のうち最も遅い謁見所でも明治21年5月23日に「竣工」したと『皇居御造営誌』に記されていることから、ほぼ予定通り進んだように見える。しかし、『皇居御造営誌』に記載された各建物の「竣工」の日付を『皇居御造営誌・皇居御造営工程表』(以下『工程表』)からわかる工事の進捗状況と比較してみると、大工工事、壁張付工事、造作材の塗装工事などは「竣工」までに終了しているが、腰壁・四分一・建具などの漆塗り、建具金物の取付、緞帳の製作などは終了していないことがわかる。このことから、『皇居御造営誌』に書かれた「竣工」とは現場工事の終了を意味していると考えられる。実際には表宮殿の追加工事と模様替えのために工事完了は明治21年11月下旬まで延期されたと考えられ、それは「新皇居宮殿向此頃増工事ハ模様替等被仰出候■々目今夫々着手致候処右ハ来ル十一月下旬ニハ悉皆落成ノ見込ニ有之候間此段予及上申置候也」¹⁸⁾(■は不明、以下同じ)などの記述にうかがえる。また表宮殿の家具・装飾品の完成は、「内部裝飾ノ内現今計画中ニ係ル曇帳其他備付品ニ至テハ猶數萬円ノ事業有之加ルニ極メテ精工ヲ尽シ随テ多數ノ時日ヲ要シ候儀ニ付到底二十二年度ニ渉ラサレハ結了難相成候」¹⁹⁾とあるように、明治22年まで持ち越されたと考えられる。

以上のように、実際の事業では予算の増額や工期の延長を伴う大幅な計画変更が行われ、それは床面積の倍増、暖房設備・家具装飾の追加など、主に表宮殿の拡充を意図したものであったと考えられる。

ところで、造営事業の予算や工期は当時の厳しい国家財政や明治23年の国会開設を前提²⁰⁾に決められたと考えられ、予算増額や工期延長は容易ではなかったと考えられる。実際の工事過程ではこうした計画変更を実行するために、着工後の比較的早い段階から、当初は年度単位で計画されていた工程や予算を工事の進捗に応じて柔軟に組み替えるなどの工夫が取られていたと考えられる。

まず建物の着工時期について見ると、実際の工事では表宮殿の着工時期が約1年間延期されたと考えられる。当初の着工予定は、『工程表』所収「建築期限工程進歩一覽表」から、第一区は明治17年7月、第二区は明治17年10月に「大工下拵一式」に着手予定となっているが、『工程表』から建物の着工時期について見ると、明治17年4月17日の地鎮祭後、奥宮殿では聖上常御殿(明治17年8月15日)、皇后宮常御殿(明治17年8月26日)などがまもなく木工事に着手したのに対し、表宮殿の主要建物は謁見所(明治18年9月1日)、饗宴所(明治18年9月6日)、など、それよりも1年近く遅れた明治18年9月頃

に木工事に着手されたことがわかる。また工事の進め方については、表宮殿を含む第二区の着工延期を補うために明治17年から18年にかけて奥宮殿を含む第一区の工事が当初の予定よりも前倒して実施されたと考えられ、明治18年12月時点の工事の進捗状況を示した「建築期限工程進歩一覧表」では、躯体工事を指す「軸建方小屋置渡」が、第一区では7ヶ月分工事が前倒しされているのに対し、第二区では5ヶ月分遅れている。

予算についても、工事の進捗状況に応じた翌年度予算の前倒しや未消化予算の翌年度への繰り越しが早くから行われていたと考えられる。明治17年度予算については、「客歳五月以来諸般ノ工事ヲ繰上ケ施行候処現今ニ於テハ非常ニ進捗致シ就テハ十七年度予算額金六拾萬圓ニテハ凡金貳拾萬圓余不足ヲ生シ到底支弁難相成場合ニ至リ（中略）依テハ総額金貳百五拾萬圓ノ内ヲ以テ十七年度假皇居御造営費中へ金貳拾萬圓増額トシテ御渡相成候様致度此段至急仰高裁候也」²¹⁾として、当初予算の60万円に加えて工事の前倒しを理由に追加予算として不足分20万円を前倒しする申請が出され、また逆に翌18年度には、「十七年度中ニ於テハ支出ノ目途無之ニ付十八年度假皇居御造営費中へ悉皆繰越目下使用致度」²²⁾として、明治17年度の未消化予算を翌18年度へ繰り越す申請が出され、それぞれ認可されている。

こうした事業計画の変更には、宮内卿・伊藤博文が深く関与していたと考えられる。従来、造営事業と伊藤博文との関係に言及したものとしては中村達太郎「皇居御造営の頃」があり、ここで中村は明治18年5月に「宮内卿伊藤博文さんが建築地實地検分の後、建築計画に大々の変更を命ぜられたのです」(p.116)と述べている。しかし小野木博士の指摘するように宮内省庁舎の移転と表宮殿の規模拡大は明治16年12月に計画されたと考えられ、明治16年8月3日に憲法調査から帰国し、明治17年3月21日に宮内卿に就任した伊藤博文は、この時にはまだ造営事業に関与する公的な立場にはいない。

伊藤博文と造営事業との関係については、宮内卿という公的な立場から造営事業全体に深く関わっていたと見る方が適切と考えられる。伊藤が事業と直接的な関係を持つのは、就任直後の明治17年4月12日に皇居御造営事務局の職制が改定され、事務局が宮内卿の管轄下に置かれてからと考えられる。就任翌月の明治17年5月7日に出された布達「皇居御造営事務章程」²³⁾では、「局中ノ事務ヲ大別シテ上下二款トナス其上款ハ卿ノ裁決ヲ経テ然ル後之ヲ施行シ」とあり、その上款に「建造物ノ位置結構（ノ大体）ヲ定メ又ハ之ヲ変更スル事」とあることから、これ以降、建物の設計変更については宮内卿の許可が必要になったと考えられる。伊藤は工程や予算の変更にも関与していたと考えられ、明治17年5月29日に当初明治21年6月と定められていた竣工期限を明治20年8月に前倒し²⁴⁾する「落成期限ノ短縮」の布達を出していることや、予算の増額や組み替えの申請の際に、事務局から宮内卿へ稟議が出されていることなどにそれがうかがえる。

3. 表宮殿の着工延期と設計変更による木造大空間の創出

前章に示したように、表宮殿の着工時期は当初計画よりも約1年延期されたと考えられる。『皇居造営録』や木子文庫所蔵史料にはこの間に作成された木割書や仕様書、設計図面などが数多く含まれており、表宮殿の着工延期は設計期間の延長を意図したものであったと考えられる。そこで本章では、『皇居造営録』と木子文庫所蔵史料を主に用いて、この着工延期の期間に行われた設計の内容を明らかにし、設計期間延長の意図について考察した。

平面計画については、表宮殿全体を描いた平面図として明治17年4月14日の地鎮祭前後の様子を示すと考えられる「宮殿内間取図」²⁵⁾と木工事着手直前の様子を示す表宮殿の全体平面図「第貳区各所柱敷座色分之分図」²⁶⁾（明治18年8月2日）があり、これらの比較から着工延期の期間に行われた平面の変更内容について知ることができる。両者を比較すると、建物の配置計画には大きな変化が見られないこと、また建坪については、受付之間や南北溜之間、附立所など小規模な付属室の床面積は拡大されているが、謁見所、饗宴所、後席之間、東西溜之間など、明治16年12月に規模拡大されたと考えられる建物には大きな変化が見られないことがわかる。

しかし天井高について見ると、謁見所、饗宴所、後席之間、東西溜之間などではこの時期に天井高が揃って高く変更されたと考えられる。表1は、「第貳区各所矩計縮図」²⁷⁾（明治18年6月12日）や木子文庫所収の棒矩計図などを用いて、この期間における主要建物の室内床面積と天井高の変化をまとめたものである。これらの史料から、室内床面積については謁見所と後席之間を除いて変化が見られないのに対し、天井高については明治18年1月頃ほぼ同時に高く変更されたと考えられ、饗宴所、後席之間、東西溜之間では明治18年3～4月に折上回数を増やして更に天井高が上げられたと考えられる。これらの建物は小屋組にトラスを用いた関係上、天井高はトラスの下弦材を支える入側柱の長さ制限されると考えて良いが、その点から見て、謁見所と饗宴所の天井高は設定可能な最大限まで上げられたと考えられる。饗宴所の天井高は謁見所よりも若干高いが、竣工建物の棒矩計図を見ると、謁見所と饗宴所の入側柱にはいずれも長さ約30尺²⁸⁾（礎石天端～桁上端）の柱が用いられており、より天井の高い饗宴所では入側柱の下に高さ1.6尺の「柱石」を挿入して対応していることがわかる。このことから、謁見所と饗宴所の入側柱に用いられた約30尺の柱は利用可能な限界寸法であったと考えねばならず²⁹⁾、天井高はその入側柱の限界長さまで拡大されたと考えられる。また、表1からこれらの建物に限って天井高の拡大と同時に柱太さが0.85尺角から1尺角へと太く変更されたことがわかるが、その理由としては、謁見所と饗宴所の天井高が23尺を超えるなど他よりも高く設定されたこと、後席之間では2面、東西溜之間では3面を壁面としているのに対し、謁見所と饗宴所では東・南・西の3面を全面開口部として壁面が北側のみに限られ、軸組の補強が必要とされたことなどが考えられる。

ところで、このように室内を無柱とする木造大空間を実現するには構造的な配慮が不可欠であったと考えられる。『皇居造営録・日誌』（以下『日誌』）の明治17年11月10日の条には「謁見所構造ヲ始其他未定之件ニ付課長以上之會議ヲ開候事」と書かれており、この時期にはこうした

表1. 表宮殿の主要殿舎に見られる地鎮祭時点から木工事着手時点にかけての内部空間の規模の変化

	室内床面積		天井高（敷居上端～格縁下端）			柱断面寸法	
	明治17年4月	明治18年8月	拡大前 ^{※1)}	明治18年1月 ^{※2)}	明治18年6月	明治17年5月 ^{※3)}	明治18年5月 ^{※4)}
謁見所	128帖	160帖	19.83尺(二重折上)	23.5尺(二重折上)	22.92尺(二重折上)	0.85尺角	1.0尺角
饗宴所	272帖	272帖	19.9尺(折上)	23.3尺(折上)	23.89尺(二重折上)	0.85尺角	1.0尺角
後席之間広間	182帖(1階)	144帖	15.88尺(平)	20.0尺(平)	21.2尺(折上)	0.85尺角	0.85尺角
東西溜之間	175.5帖	175.5帖	不明(平)	17.3尺(平)	18.83尺(折上)	0.8尺角	0.8尺角
西溜之間	175.5帖	175.5帖	不明(平)	17.3尺(平)	18.83尺(折上)	0.8尺角	0.8尺角

注：1) 木子文庫史料、2) 「第貳区各所内法及天井高サ之図」（木子文庫）、3) 「木割書」（『皇居造営録・謁見所』所収）、

4) 「第貳区負担御建物各所木割表」（注3）に同じ）、（）内は格天井の形式を表す。

木造大空間を実現するため、構造形式などの技術的側面についても検討されたと考えられる。この大空間の小屋組に洋風トラスが用いられたことについては、小野木重勝『近代和風宮廷建築における和洋折衷技法に関する研究』によって既に明らかにされている(pp.11-13)が、その導入時期については不明な点が多く、今回史料を用いてその点を検討したところ、実施過程については小屋組のわかる最も古い図面(謁見所・明治17年8月1日)³⁰⁾において既に巻金物やボルトで金物補強されたトラスが用いられていたこと、計画案も含めると明治15年10～12月頃の吹上宮殿計画³¹⁾では、梁間5.5間の内謁見所がトラスで計画されていたことがわかった。トラスの正確な導入時期については不明であるが、これらのことから見て、実施過程では早い段階からトラスの使用が想定されていたと考えて良い。

また大空間を覆う大屋根については、その巨大な屋根荷重の処理も技術的な検討課題であったと考えられる。中村達太郎「皇居御造営の頃」では、屋根葺材についても他の変更と同様に伊藤博文の指示によって当初予定されていた瓦葺きが銅板葺きに変更されたと書かれているが、史料から屋根葺材の変更がこの着工延期の期間に行われていたことが確認できた。すなわち木子文庫所蔵の「第貳区屋根色分之図」³²⁾(明治17年6月27日)では「本瓦葺」で計画されていた表宮殿主要建物の屋根が、明治18年の「築造仕法書」³³⁾ではすべて銅板瓦棒葺へと変更されている。この屋根葺材の変更は屋根荷重の軽量化を意図したものであったと考えられ、「屋根瓦土其外共重量試験之儀上申」³⁴⁾(明治17年8月11日)には、「饗宴所御屋根本瓦葺ニ付瓦及ヒ葺土トモ重量相斗糞ニ小屋組五分之一雛形製造石シ盤石ヲ葺立重器比較処別書之通ニ有之此段上申候也」と、屋根葺材の検討に際して5分の1の模型を用いた載荷試験が行われたことが記されている。

この時期には、これら大空間に使用する暖房設備の選定作業も進められたと考えられる。機械暖房が設置されたのは謁見所、饗宴所、後席之間、東西溜之間、内謁見所、南溜之間の7棟で³⁵⁾、『皇居御造営誌・宮殿室内暖温機械据付事業』によれば、導入された「独逸國製蒸気空気暖温機械」とは、饗宴所北側のポイラー室で起こした蒸気を廊下床下に設けたトンネルで各建物まで送り、各建物の床下に設けた「暖温気室」で空気と混合させ、再度熱した混合蒸気を床の四隅から室内に送り込むという方式であった。同書には暖房設備の選定経緯について、「其機械ノ果シテ日本様家屋ニ適シテ更ニ無害ヤ否ヲ見認ント欲シテ明治十七年七月五日在独逸國全權公使青木周蔵ニ鑑査ヲ依頼スル」と、明治17年7月にはカールローデ社を通じて欧米で導入されている暖房設備の調査が始められ、最終的には、「謁見所東西溜ノ間饗宴所後席ノ間等ニ装置ス可キ暖温機械ヲ独逸國漢堡カールローデ商會同盟東京京橋区銀座刺賀商會ニ購買ヲ命ス」³⁶⁾と、明治18年7月11日に購入約定書が交わされた経緯が記されている。

暖房設備の選定条件としては、まず大空間に適用可能であることが求められたと考えられる。『皇居御造営誌・宮殿室内暖温機械据付事業』には、機器の選定過程において、欧米で実績のある「空気暖房」、「蒸気暖房」、「熱湯暖房」の長所・短所が比較された経緯が記されているが、最終的に「蒸気空気暖房」が採用された理由については、「創設費ノ高費ニ帰スルコト」としながらも、その長所として「空気配布ノ均一ニシテ働キノ様ナルコト極メテ清潔ナルコト」と、大空間への適性を挙げている。それに対して「空気暖房」は、「室ノ廣濶ナルトキハ勢ヒ多数ノ『カロリフエヤ』ヲ要スルノ理由アリ依テ此法ハ宮

室ヲ暖温スルニ適用ス可ラザルモノトス」と指摘され、「蒸気暖房」は「管ニ温熱ヲ與ヘルノミノ法ナルガ故高度ノ温気ハ常ニ管ノ近傍ノミニ留滞最モ甚シトス故ニ室内到ルトコロ温気ヲ均一ニ配布シ難シ」と、いずれも大空間を一様に暖房するのに不適であることが指摘されている。選定条件としては、「日本建築への適応性」も重視されているが、この中には火災に対する配慮もあったと考えられ、「蒸気空気暖房」の長所には「火災ノ憂ナキコト」も挙げられている。

4 工事過程の設計変更による内部意匠の洋風化

着工後の工事の進捗状況について、『工程表』を用いて検討すると、表宮殿の主要建物では明治19年12月末には躯体工事がほぼ終了し、明治20年には内装工事に着手できる状態にあったと考えられる。まず大工工事を意味する「建築大工人足方」は、明治19年12月末の時点で表宮殿の主要建物が作業工程の85%を終了しており、翌月から作業ペースを落としていることがわかる³⁷⁾。屋根工事については、素屋根工事を意味する「上家取設及盛換方」が明治19年12月に終了し、屋根下地工事を意味する「屋根銅葺下柿葺方」も明治19年12月に終了していたと考えられる。暖房工事については、「第壹回暖温機械謁見所外五ヶ所隧道煉化積工事」つまり配管用の床下トンネル工事が明治19年9月30日に終了し、「焚試ハ十月一日ヨリ一週間トス」³⁸⁾とあるように、翌10月1日には試運転が行われたと考えられる。一方、内装工事について見ると、天井工事としては、「格天井漆塗方」や「折上天井格天井共取解及取付方」などに明治20年1月から着手しており、床工事では、床下への暖房装置の設置に伴う工事と考えられる「根太仕直シ方仕増工事」が明治20年2月21日～3月7日の期間に行われ、4月からは「寄木張方」に着手したことがわかる。

『皇居造営録』所収の史料のうち、表宮殿の内部意匠に関するものにはこの躯体工事から内装工事へと切り替わる明治19年末から明治20年前半にかけて作成されたものが多いが、それらには「模様替」に関するものが多く含まれていることから、この時期には表宮殿の内部意匠が変更された可能性が高いと考えられる。そこで本章では、『皇居造営録』所収の史料を用いてこの「模様替」前後の意匠についてできるだけ明らかにし、またその変更の時期についても明らかにした。

着工時の表宮殿の内部意匠について具体的に知ることのできる史料として、『皇居造営録』所収の「築造仕法書」がある。この「築造仕法書」は、作成後まもなく大工工事に着手している³⁹⁾ことから実際に使用された仕様書と考えて良く、主要建物の多くについて作成されているため、表宮殿全体の考え方についても知ることができる。あくまでも大工工事の仕様書であるため、装飾や仕上工事などに関する記述はほとんど見られないが、軸組や天井形式など大工工事に係る部分の内部意匠については知ることができる。

まず、この「築造仕法書」と『皇居御造営誌』を用いて、これらに記載された着工時の内部意匠と竣工時の内部意匠について表2にまとめた。表2から、着工から竣工に至るまでの工事過程において、内部意匠では床を除く壁面と天井の意匠が設計変更されたことがわかる。またその変更内容については壁面と天井とに大きく分けられ、壁面については、入側建具は着工時に引違いで計画されていた建具が工事途中で内開きのガラス扉に変更され、着工時に巾木(「築造仕法書」には「軌摺」⁴⁰⁾と記録)で計画されていたものが腰壁へと変更されるなど、より洋風色の強い意匠へと変更されたと考えられる。また天井

については、着工時に「小組格天井」や「板張付」など木地仕上げの意匠で計画されていたものが、漆塗格縁、鋳金物、極彩色の張付模様からなる装飾性の高い天井へ変更されたと考えられる。

次に、『皇居造営録』所収の史料を用いて内部意匠が変更された時期について検討した。その結果、入側建具、腰壁、天井のいずれも明治20年に入って決定され、直ちに工事に着手されたと考えられる。

入側建具については、木子文庫に明治19年1月・9月作成の建具図面⁴¹⁾があることから、この時期に建具意匠の検討が行われたと考えられる。建具意匠の変更が決定したのは、「謁見所製作建具仕様書」⁴²⁾(『皇居造営録』所収)など竣工建物と同じ内容の仕様書が作成された明治20年2～4月と考えられ、3月には建具用の輸入ガラスが発注⁴³⁾されるなど、変更後すぐに製作にとりかかったと考えられる。

腰壁の導入時期はやや遅く、明治20年5～6月に決定したと考えられる。腰壁の導入経緯については滞欧中の片山東熊と事務局との電報⁴⁴⁾から知ることができ、「饗宴所ノミ腰羽目ノ高サ八十五センチメートルニセヨ巾木ハ御随意ニ希フ」(片山→事務局：明治20年5月11日)とあるように腰壁はまず饗宴所に導入されたと考えられる。すべての主要建物に腰壁が導入されたのは、事務局と京都出張中の荒川新一郎との間で交わされた電報⁴⁵⁾から、明治20年6月頃と考えられ、電報には「謁見所腰羽目高サ式尺八寸東西溜之間式尺二改正ス」(事務局→荒川：明治20年6月21日)、「後席廣間腰羽目高サ式尺八寸同所婦人室小食堂等巾木高サ式尺寸東西溜ノ間腰羽目高サ四尺四寸各室トモ改正ス」(事務局→荒川：明治20年6月24日)とある。

天井意匠について見ると、謁見所では明治19年には小組格天井以外の意匠が検討され始め、明治20年2月に張付天井への変更が決定したと考えられる。それは、木子文庫の史料に二重折上の平の部分に2種類の格間(3.1尺四方と6.6尺四方)を混用した計画案(明治19年1月10日)など3種類の天井伏図⁴⁶⁾が含まれていること、『皇居造営録』に「呈正二十年二月御模様替増費」⁴⁷⁾として「間内格天井小組之所張枠ニ御模様替」と記されていることにかがえる。また謁見所では、明治20年2月10日に印刷局へ張付模様紙の製作が発注されたこと、『皇居御造営誌・天井張打出紙其他製紙事業』に記されていることから、張付天井への変更決定とほぼ同時に製作が発注されたと考えられる。一方、東西溜之間では、一度「板張付」で着工されたものが、工事途中で張付天井に変更されたと考えられる。「東西溜之間鏡天井板刻木仕拵仕様書」⁴⁸⁾に「矧板桧征目厚壹分」とあることから、明治19年10月にはいわゆる板違格天井で計画され、『工程表』によれば同年12月1日にはその工事「東西溜之間鏡天井板刻木仕拵一式工事」に着手している。しかし、明治20年3月には竣工建物とほぼ同じ張付天井の仕様書「東西溜之間及廊下共格天井張付仕様書」⁴⁹⁾が作成され、3月1日にはその工事「東西溜ノ間格天井張付枠模様替方」に

着手したことが『工程表』からわかる。

なお、壁面意匠の洋風化については入側建具や腰壁の他に、軸組に加えられた変更にも見ることができる。『工程表』には明治20年2～4月に謁見所・饗宴所・後席之間に「御模様替ニ付柱面取外工事」が行われたと書かれているが、この「柱面取」は竣工建物の仕様書にある「唐戸面取」を指すと考えられる。これは、柱以外に鴨居の下端や方立にも施されている⁵⁰⁾ことから、入側建具が引違から開き扉へと変更されたのを受け、柱や鴨居・方立を洋風の建具枠に見立てた変更と考えて良い。また、当初真壁で計画されていた東西溜之間の壁面が大壁に変更されたのもこの時期であったと考えられ、東西溜之間それぞれについて「中之間内法り長押天井長押トモ御模様替ニ付木削リノ上返木」⁵¹⁾(明治19年12月21日)と、真壁の建物を大壁へと改修したことを示す史料が遺されている。

ところで、着工時の壁仕上げについては、表2に示すように「築造仕法書」には「出壁有壁共張付」とあるのみで、張付の素材や模様については書かれていない。「総テ絵画或ハ彩色等ニ係ル事ハ博物館長山高信離専ラ之ヲ指揮セリ」⁵²⁾とあることから、明治宮殿の装飾が本格的に検討されたのは、山高信離が囑託として参加した明治18年6月8日以降になってからと考えられ、着工時にはあまり詳細に決定されていなかったことも考えられる。

織物の使用が検討され始めたのは、明治19年7月頃と考えられる。織物事業を担当した農商務技師・荒川新一郎が正式に囑託となるのは明治20年5月12日⁵³⁾であるが、別の史料には「御省四等技師荒川新一郎へ皇居御造営御間内装飾取調ノ儀依頼致度候」(明治19年7月22日)⁵⁴⁾とあることから既に明治19年7月の段階で事務局から協力を打診されていたと考えられ、また同年7月20日には京都で織物産業の近代化に取り組んでいた京都府織殿御用掛の稲畑勝太郎にも「皇居御造営装飾用織物染色取調」が依頼されている⁵⁵⁾。また、『日誌』に「権少技長荒川新一郎出所ニ■稲畑勝太郎等■宮殿内装飾織物之義面談之処折柄京都織殿員近藤徳太郎上京御用伺之為来局■居ニ付織物為考案御場所内へ同行一見セシメタル事」(明治19年8月1日)と、8月1日には既に荒川と稲畑が面談したと書かれていることから、翌8月には具体的な検討段階に入っていたと考えられる。表宮殿の壁仕上げを織物張付にすることが最終的に決定したのは、片山東熊と事務局との電報に「時日ナシ壁上へ皆壹打綴子ヲ用ユルニ決ス」(事務局→片山：明治20年4月2日)とあることから、明治20年4月2日であったと考えられる。織物の製作は、荒川新一郎が正式に事務局と契約を結んだ5月から始められたと考えられ、正式採用の理由にも「頃日右装飾取調向ハ勿論現業頗ル煩繁ノ秋ニ際シ専ラ従事不致候テハ差支モ不候ニ付即今ヨリ来ル八月中迄當局へ借用ノ上該事業専担為致候様致度候條御縁合御示命相成度此段及御照會候也」⁵⁶⁾と、5月から8月にかけて業務が多忙を極めるであろうことが書かれ、また5月2日には、荒川新一郎から京都の織物業者である川島甚兵衛へ「イトノヨヲイシテヨロシ」(明治20年5月2日)との電報も打たれている。

なお、織物以外の洋風の壁仕上げとしては、壁紙貼りも検討されたと考えられる。『印刷局沿革録』(印刷局、明治40年)⁵⁷⁾の明治19年度の項には、「是年皇居御造営用壁紙ヲ製造ス」(p.126)といった記述が見られ、また『日誌』にも、「印刷局以縁紙見本四冊壁紙少切レ四枚壁紙見本壹冊等為参考送り来ルニ付」(明治19年12月8日条)と記されている。この明治19年に製造された「皇居御造営用壁紙」は、

表2. 表宮殿の主要建物に見られる着工時と竣工時の内部意匠の比較

	床仕上	入側建具	壁面	壁仕上げ	天井形式
謁見所	着工時 寄木張	(模及硝子戸)	乾摺*	出壁有壁共張付	二重折上小組格天井
	竣工時 寄木張	腰付硝子開戸	腰羽目	襖子張	二重折上塗格天井張付
饗宴所	着工時 寄木張	模及硝子戸	乾摺*	出壁有壁共張付	二重折上格天井板張付
	竣工時 寄木張	腰付硝子開戸	腰羽目	襖子張	二重折上塗格天井張付
後席之間(廣間)	着工時 寄木張	模・漆障子付	乾摺*	出壁有壁共張付	折上格天井板張付
	竣工時 寄木張	腰付硝子開戸	腰羽目	襖子張	折上塗格天井張付
東溜之間	着工時 寄木張	舞良戸建硝子扉	乾摺*	出壁有壁共張付	折上格天井板張付
	竣工時 寄木張	腰付硝子開戸	腰羽目	襖子張	折上塗格天井張付
西溜之間	着工時 寄木張	舞良戸建硝子扉	乾摺*	出壁有壁共張付	折上塗格天井板張付
	竣工時 寄木張	腰付硝子開戸	腰羽目	襖子張	折上塗格天井張付

注：着工時の意匠は「築造仕法書」による。また竣工時の意匠は『皇居御造営誌』による。着工時の床仕上は「大工手間人足内訳概算調」(明治18年、『皇居造営録』所収)による。着工時の謁見所入側建具は木子文庫史料による。また、印は後に朱で削除されているもの。

明治20年10月に製作が発注され表宮殿の廊下実際に使用された壁紙⁵⁸⁾とは製作時期が異なることから、室内か廊下用の試作品であった可能性が高いと考えられる⁵⁹⁾。

5. 内部空間の壮麗化と宮中夜会の重視

第3章、第4章で見たように、明治宮殿の特徴として知られる表宮殿の大空間・和洋折衷意匠からなる内部空間は、着工当初から決定していたのではなく、地鎮祭後の工事過程において、天井高の拡大や内部仕上の装飾化・洋風化を意図した設計変更などが加えられて形成されたものであったと考えられる。本章ではこれらのことを踏まえ、家具デザインの考え方や竣工後の使われ方を含めて見ることで、この内部空間の壮麗化が何を意図して行われたかについて考察した。

表宮殿の洋風家具については、『明治工業史 建築篇』や『鳳閣』（上野竹次郎編、大正14年、興文堂）などの刊行本に掲載された写真がよく知られており、写真を見る限り、ルネサンス風（饗宴所）、バロック風（後席之間）、ロココ調（婦人之間）など、純洋風の様式家具が用いられている。これらの写真の撮影時期については不明な点が多く、必ずしも竣工時の状態を示しているとは限らないが、明治21年10月10日の皇居御造営残業掛への引継に際してつくられた「装飾具明細書」⁶⁰⁾に、「大食器棚（左右二織ヲ付ス）」1個、「大鏡」2個（いずれも饗宴所）や「鏡」3面、「鏡台」3個（いずれも後席之間）とあることから、鏡台などの大きな家具は竣工時のものと見てほぼ間違いない。周知のように、これらの家具はドイツのカールローデ社を通して購入された⁶¹⁾が、カールローデ社が洋風家具導入の際に描いていたイメージについては、『皇居御造営誌・家具装置事業』第1巻所収の「大日本東京皇居御造営御装飾品ニ係ル説明書」（以下「家具計画書」）および「家具及敷物約定書附属書」（以下「約定書」）⁶²⁾に窺うことができ、ここでは謁見所、饗宴所のように使用目的が明確でない部屋に対して、東溜之間は「吸煙室及ヒ骨牌室（Smoking and card Room：英語は原文写⁶³⁾）」、西溜之間や婦人室は「舞踏室（Ball Room）」と位置づけ、また後席之間（Drawing room）には「合奏ニ用ユル大ナル『ピアノ』」を計画している。つまり、カールローデ社は家具計画のイメージとして欧米風の「夜会」を想定し、表宮殿の洋風家具はそれに基づいて導入されたと考えられる。

これら洋風家具の導入が決定した時期については、内部意匠の洋風化に先立つ明治19年の後半であった可能性が高いと考えられる。理由としては、片山が渡欧した明治19年12月31日の時点では、饗宴所以外の部屋はまだ洋風家具の使用が確定しておらず⁶⁴⁾、よってカールローデ社への家具計画の依頼時期も明治19年12月からそれほど遅くないと考えられること、また宮中における夜会の開催は、皇后が洋装化を天皇から許可された明治19年6月以降にならないとほとんど実現性がないことなどが挙げられる。また、第4章で示したように、壁仕上げへの織物張付の適用は明治19年7月以降に検討され始めたと考えられるが、滞欧中の片山東熊と御造営事務局との間で交わされた電報に、「壁張附織物色合ハ（中略）尤モ右各室特ニ謁見所後席之間西溜ノ間ノ三室ハ家具ニ相当セ子バナラス」（明治20年4月5日：片山→事務局）とあることから、織物張付・洋風家具ともにお互いの調和を考慮して同時期にデザイン・色彩が検討された可能性が高い。

一方、竣工後の表宮殿で行われた宮中儀礼の内容について、『明治天皇紀』（宮内庁、昭和47年ほか）を用いて検討すると、年中行事の

「朝儀」と不定期に行われた「大典」とでは、内容が大きく異なっていたと考えられる。すなわち、「朝儀」である新年宴会（1月5日）、紀元節賜宴（2月11日）、天長節賜宴（11月3日）の三大節賜宴では、皇后を始め婦人は不参加で、賜宴は和食昼餐で行われたのに対し、「大典」として行われた憲法発布式（明治22年2月11日）、皇紀2550年紀元節（明治23年2月11日）、大婚25年祝典（明治27年3月9日）、皇太子御成婚の礼（明治33年5月10日）、ガーター勲章捧呈式（明治39年2月20日）は、皇后を含め夫人同伴で行われ、賜宴は大規模な洋風の夜会形式で行われている⁶⁵⁾。つまり、カールローデ社の家具計画書で想定された宮中夜会の形式は、明治初頭から行われていた三大節賜宴などの朝儀には適用されず、明治宮殿竣工後に初めて行われるようになった大典において適用されたことがわかる。

以上のことから見て、洋風家具も含め、表宮殿に見られる壮麗な内部空間は、竣工前には前例のなかった「宮中夜会」を想定して創出されたものと考えて良いと思われる。このような宮中夜会の開催は、宮内卿時代の伊藤博文が強く主張した宮中政策であったことが知られている⁶⁶⁾が、このことと伊藤博文の造営事業における権限の強さ、設計変更の時期などを考え合わせると、表宮殿の壮麗な内部空間は、宮内卿・伊藤博文に代表される明治新政府の「近代の宮殿」に対する考え方が強く反映したものとして位置づけることができる。

6. 結論

本稿では、宮内庁所蔵史料や木子文庫所蔵史料を用いて、明治16年7月以降の明治宮殿の建設経緯に見られる表宮殿の内部空間の設計過程を分析し、以下のことを明らかにした。

事業は当初、工期5年・予算250万円で始められたが、計画変更により最終的に事業費は415万3067円6銭4厘に増え、工期も明治22年度まで延長された。増額分のほとんどは表宮殿の拡充に費やされ、床面積の倍増、暖房設備・家具装飾の追加が行われた。また計画変更を実行するための工夫として、着工後の早い時期から着工延期や工事の前倒し、予算の前倒しや繰り越しなど、工程や予算が工事の進捗状況に応じて柔軟に組み替えられた。

こうした計画変更には、宮内卿・伊藤博文が公的な立場から深く関わっていたと考えられる。特に「皇居御造営事務章程」が出された明治17年5月7日以降は建物の設計変更にも宮内卿の許可が必要になり、また予算・工程の変更にも宮内卿の許可が必要とされた。

実際の工事では、表宮殿では着工延期によって設計期間が約1年間延長され、明治17年4月から明治18年9月頃の期間に行われた設計変更では、天井高の拡大による内部空間の拡大とその大空間に必要とされる構造への配慮、暖房設備の選定などの技術的検討が行われた。また、躯体工事から内装工事に切り替わる明治19年末から明治20年には表宮殿の内部意匠が設計変更され、壁面と天井がより装飾的で洋風色の強い意匠へと変更された。

以上のことから、表宮殿の内部意匠は着工時に計画されたのではなく、造営過程の設計変更によって形成されたと考えられる。また内部意匠の壮麗化は、ドイツから輸入された洋風家具とともに、それまで前例のなかった宮中夜会を想定したものであったと考えられ、このことは宮中夜会の開催を重視した宮内卿・伊藤博文の宮中に対する考え方とも一致する。これらのことから、表宮殿の壮麗な内部空間には、伊藤に代表される新政府の考え方が反映していると考えられる。

【謝辞】本稿を作成するにあたり、宮内庁書陵部の小坂敏郎氏（当時）には史料閲覧に関してお世話になりました。記して謝意を表します。
【註】

- 1) 明治宮殿を取り上げた通史には、桐敷真次郎『明治の建築』（日経新書、昭和41年、pp.95-98）、村松貞治郎・近江栄編『近代和風建築』（鹿島出版会、昭和63年、pp.114-117）がある。近代和風建築に関する研究論文では、藤原恵洋『日本近代建築における和風意匠の歴史的研究』（東京大学博士論文、昭和62年）で明治宮殿を取り上げている。研究論文以外で表宮殿の内部意匠を論じたものに、桐敷真次郎「宮殿建築の『種』・明治宮殿の室内装飾と二代川島甚兵衛-J」（『KAWASHIMA』12号、昭和58年9月、pp.15-18）がある。いずれも本研究とは使用史料、考察の目的が異なると考えられる。
- 2) 「前者（明治宮殿：筆者註）は最終的には木造宮殿となったが、その計画過程でしばしば洋風宮殿の計画が試みられ、その技術的成果は、一般建築界の発展にも少なからぬ影響を及ぼした」（p.2）
- 3) 「表宮殿における洋風の導入の仕方を見ると、様式やデザインの源泉を海外に求めるといった積極的な建築的要求によるものではなく、表宮殿の構造あるいは機能上の必要性から生じたものとみてよいであろう」（p.19）
- 4) 「『日本銀行本店』（明治二十九年）の貴賓室に、表宮殿と同様に和洋折衷技法に基づく室内意匠が採用されている事実は、この様式が正式な接客空間にふさわしいものとして認知されていたことを物語っている」（大川三雄「和風大邸宅に見る近代の諸相」（『月刊文化財』平成13年10月、p.11）など
- 5) 『皇居御造営誌編纂下調図』第84号図面（明治16年12月14日）は宮内省庁舎移転後の状態を示しており、付箋に「明治十六年十二月六日ヨリ十日マテ二日論見同十一日午前第一時上局へ差出同十三日上局ヨリ該図被下付直ニ鍍引布へ製シ同十四日午後二時上局へ差出シタル原因」とあることから小野木博士の説と一致する。
- 6) 同史料には附属編として、明治初年からの計画図をまとめた『皇居御造営誌編纂下調図』（2冊）、主に設備図に関する『皇居御造営誌御建物其他明細図』（34冊）、内部装飾の縮小色絵図をまとめた『皇居御造営内部諸装飾明細図』（32冊）が作成されている（いずれも宮内庁所蔵）。
- 7) 宮内庁書陵部図書課公文書係への聞き取りによる。本研究では、建物の設計内容を知ることができるものを中心に117冊閲覧した。
- 8) このことについて『皇居御造営誌・巻之六』には、「工事着手及び落成上申ノ儀ハ從來（第何号伺済ノ件明日着手）等余り簡易ニ過クルヲ以テテ々其原書ニ対照セザレバ巨細ヲ瞭知スル能ハス工事ノ進捗ニ從ヒ書類亦牛牒ナラント處リ着手及落成ノ上申ニ限り自今別紙書式ニ擬ラシム又九月二十七日ニ至リ購買ノ諸物品納付済ノ上申書式モ工事着手落成上申ノ式ニ準擬セシム」（明治17年1月21日条）と書かれている。
- 9) 『皇居御造営誌編纂下調図』所収「謁見所以下地之間図」（表宮殿、日付なし）「常御殿以下四百分一」（奥宮殿、明治18年8月調）を用いて作成した。これらは内容から最終図面と考えられ、竣工時に最も近いと考えられる。
- 10) 『明治工業史 建築篇』（p.424）に明治末年の「本館」の延坪として記載されている。この「本館」がどこを指すのか不明である。また現時点では竣工時の建物の床面積を正確に把握できる史料を見出していない。
- 11) 御学問所、侍從武官詰所は木造2階建て、饗宴所北側のボイラー室は煉瓦蔵で建設されたと考えられる。
- 12) 本稿では、明治宮殿の代表的な特徴である大空間・和洋折衷意匠を持つ謁見所、饗宴所、後席之間広間、東西溜之間の5つの建物を中心に考察を進めるため、これらの建物を便宜的に「主要建物」と呼ぶことにする。
- 13) 木子文庫所収「第壹区坪数及附属共調書」（史料番号・木119-3-005-05：明治16年8月3日）に、聖上常御殿は「拾壹間式分五厘」「拾三間」の「百四拾六坪式合五勺」、皇后宮常御殿は「九間」「拾間」の「九拾坪」と書かれており、これは竣工建物の床面積（聖上常御殿：146.13坪、皇后宮常御殿：90坪）とほぼ一致する（但し聖上常御殿はいずれも1間=7尺換算）。
- 14) 木子文庫所蔵図面から判断した。暖炉の設置位置についてはその後の変更も見られる。
- 15) 木子文庫所収の計画書（木119-3-005-1：明治16年8月9日）に「第貳区三千六百〇〇六坪貳合五勺 内千五百六拾式坪御殿ノ分」とあり、ここでは第二区から既の分を引いた床面積を表宮殿の面積とした。
- 16) 『皇居御造営誌・皇居御造営経費顚末 決算之部壹』
- 17) 『皇居御造営誌・巻之七』明治18年5月29日条、明治19年12月21日条、費目についても同じ。決算との差額は利息と考えられる。
- 18) 『皇居御造営誌・巻之八』明治21年10月8日条
- 19) 『皇居御造営誌・巻之八』明治21年9月25日条
- 20) 「二十二年竣工遷幸ヲ企望スルモノハ既ニ二十三年ニ於テ國會開設ノ大詔ヲ発セラレ候ヘハ是等ノ大典ヲ被為挙ニ於テ皇室ノ尊嚴人民ノ■仰ヲ繁ク最モ關係ヲ有スル大ナル事トス是年度ヲ期スル理由ニ候」（『皇居御造営誌・巻之六』明治16年2月12日条）から、吹上宮殿計画では、明治23年の国会開設に間に合うように竣工時期が設定されたと考えられる。
- 21) 『皇居御造営誌・皇居御造営経費顚末 予算之部壹』明治18年3月17日条
- 22) 『皇居御造営誌・皇居御造営経費顚末 予算之部貳』明治18年12月10日条
- 23) 『皇居御造営誌・巻之七』明治17年5月7日条
- 24) 「別表月割図ノ通凡来ル二十年八月ヲ以テ竣工可致見込ニ有之候」（『皇居御造営誌・巻之七』明治17年6月18日条）
- 25) 宮内庁書陵部所蔵、日付はないが、『皇居御造営誌編纂下調図』第88号図面（明治17年4月14日）と平面がほぼ一致することから判断した。
- 26) 『皇居造営録・謁見所』所収、明治18年8月2日
- 27) 『皇居造営録・謁見所』所収、明治18年6月12日

- 28) 図面に定規をあてて測った値
- 29) 『皇居御造営誌・木材挽立事業』には、船輸送木材の最大寸法について「脊尺角以上長三丈五尺五寸迄」と書かれている。
- 30) 木子文庫所収「謁見所小屋組」（木085-1-003：明治17年8月1日）
- 31) 木子文庫所収「内謁見所正面二拾分一小屋組図」（木100-2-009：日付なし）、梁間が5.5間であることなどから判断した。
- 32) 木子文庫所収「第貳区屋根色分之間」（木109-1-061：明治17年6月27日）
- 33) 本稿第3章および註39参照
- 34) 『皇居造営録・饗宴所』所収、明治17年8月11日
- 35) 『皇居御造営誌・宮殿室内暖温機械据付事業』より、第一期（明治19年5月着工）として謁見所、饗宴所、後席之間、東西溜之間、内謁見所の6棟に敷設され、やや遅れて南溜之間に敷設（明治20年3月着工）された。
- 36) 『皇居御造営誌・巻之七』明治18年7月11日条
- 37) 謁見所の場合、明治19年7～12月には月あたり2.8～2.9%であった作業量が、明治20年1月は0%、2月・3月は1%に留まっている。
- 38) 『皇居御造営誌・巻之七』明治19年9月30日条
- 39) 『皇居造営録』所収「築造仕法書」の作成時期は、謁見所が明治18年7月、饗宴所が明治18年6月、後席之間が明治18年6月、東溜之間が明治18年3月、西溜之間が明治18年5月となっている。木工事着手の日付は、『皇居御造営誌・巻之七』より、謁見所が明治18年9月1日、饗宴所が明治18年9月6日、後席之間が明治18年9月12日、東西溜之間が明治18年8月5日となっている。
- 40) 『皇居御造営誌・東車寄』所収「受附之間及南北溜之間其他仕様書」には「南北溜之間廊下トモ輦摺高サ八寸上下框見付貳重決り丸面取り」とあり、この「輦摺」も同様にいわゆる巾木のことを指していると考えられる。
- 41) 木子文庫所収「謁見所入側戸口内面」（木099-2-001-11：明治19年6月22日）、「後席廣間之間図」（史料番号・木080-1-001：明治19年1月7日）
- 42) 『皇居造営録』所収の建具仕様書の作成時期は、謁見所が明治20年2月、饗宴所が明治20年3月、後席之間が明治20年4月となっている。
- 43) 『皇居造営録・雑品』第37巻所収「謁見所其他建具用硝子板伊理斯商社ヨリ購入方ノ件」明治20年3月3日
- 44) 『皇居造営録・片山技師独逸出張装飾品購買諸件』第3巻所収、明治20年3月11日から同年10月5日までの電報73通が収録されている。
- 45) 『皇居造営録・雑品』第41巻所収、明治20年4月6日から同年6月29日までの電報29通が収録されている。
- 46) 木子文庫所収「謁見所天井伏百分壹之間」（木100-2-056：明治19年1月10日）、謁見所天井伏図（無題）（木099-2-015-1・2：明治19年4月11日）、および謁見所天井伏図（無題）（木100-2-058：日付なし）の3点
- 47) 『皇居造営録・謁見所』所収「謁見所格天井御模様替ニ付増減御入費調書」、明治20年12月
- 48) 『皇居造営録・東溜之間・西溜之間』所収、明治19年10月
- 49) 『皇居造営録・東溜之間・西溜之間』所収、明治20年3月
- 50) 「入側鴨居下端戸面取り」、「欄間敷居鴨居方立共唐戸面取」と書かれている（『皇居御造営誌・謁見所』など）。
- 51) 『皇居造営録・東溜之間・西溜之間』所収「西溜之間御模様換臨時工事増減差引増御入費」（明治19年12月21日）、「東溜之間御模様換臨時工事御入費」（明治19年12月21日）
- 52) 『皇居御造営誌・家具装置事業』第1巻
- 53) 『皇居御造営誌・巻之七』明治20年5月12日条
- 54) 『皇居御造営誌・各種織物事業』明治19年7月22日条
- 55) 『皇居造営録・雑品』第22巻所収、明治19年7月20日
- 56) 『皇居御造営誌・各種織物事業』明治20年5月12日条
- 57) お礼と切手の博物館所蔵
- 58) 『皇居御造営誌・天井張打出紙其他製紙事業』、明治20年10月18日条
- 59) 「お礼と切手の博物館」には明治宮殿の壁紙として伝わる金唐革紙製の壁紙が保存されている。この壁紙については、久米康生「明治の『芸術産業』金唐革紙」（『きんからかわ 革と紙の東西交流』INA BOOKLET、昭和59年、p.55）、久米康生「彫飾と紙譜」（平凡社、平成6年、p.176）に詳しい。
- 60) 『皇居御造営誌・巻之八』明治21年10月10日条
- 61) 中村圭介『文明開化と明治の住まい-暮らしとインテリアの近代史（上）-』（理工学社、平成12年）第2章第3節（p.63）
- 62) 『皇居御造営誌・家具装置事業』所収、いずれも日付なし
- 63) 『皇居造営録・片山技師独逸出張装飾品購買諸件』第1巻所収「装飾品説明書同内訳書」および「独逸國エ注文装飾品約定原書写」
- 64) 「就中食堂ハ銀貨三萬九千九百拾八弗五拾四仙ノ確定シタル金額ヲ以テ十ヶ月内ニ東京ニ於テ交付スベキ注文ヲ了リ残余ノ家具ハ片山出仕歐洲へ着ノ上爰ニ附添スル所ノ原計算書ニ基キ同出仕カ必要ト思考スル所ハ之ニ増減ヲ行ヒ十二ヶ月内ニ東京ニ於テ交付スルノ定約ヲ為ス」（『皇居御造営誌・家具装置事業第壹』所収「定約書」）
- 65) 「明治天皇紀」によれば、朝儀の参加者は親王、公卿、大臣、親任官、勅任官、爵寄間候祇候、各国公使など天皇側近に限られていたと考えられる。大典では、最も規模の大きい皇太子御成婚の礼で、皇族、大勲位以下一等以上、各国公使、勲二等、勅任官、有爵者、奏任官三以下五等以上とその夫人が招かれ、晩餐会は饗宴所に1200人、後席の間広間に150人、東溜之間に650人と、複数の殿舎にわけて行われたと記されている。
- 66) 宮内卿・伊藤博文の宮中夜会に対する関心の高さについては、坂本一登『伊藤博文と明治国家形成-『宮中』の制度化と立憲制の導入-』（吉川弘文館、平成3年）第二章第二節および第三章第三節に詳しい。

（2003年4月10日原稿受理、2003年7月4日採用決定）